

留学を終えて

恵那高等学校 大堀 寛太（アメリカ合衆国）

まず初めに、様々な方の支援があり、私は今回の留学を実現することができ、無事に終了できたことを感謝したいです。

私は、アメリカ合衆国のミズーリ州に約10か月間、交換留学生として現地の高校に通っていました。私がこの留学で得た力は大きく分けて2つあります。

1つ目は、自己規律です。今回、初めて親元を離れ、全く新しい場所で生活をするという経験をしました。自立して様々なことを自分でしなければならなくなり、当初は圧倒される毎日でした。日本では、家事の手伝いなどを通じて、部分的には自立しているつもりでした。しかし、言語も食事も違う状況で、さらに多くのことを自分の責任でしなければいけない環境は私にとっては何よりも圧倒的に挑戦でした。特に最初の2か月ほどは、自分の家事をやり切れないことが多く、ホストファミリーのストレスになってしまっているのを感じました。しかし、時間が経つにつれて、滞在先での生活にも慣れ、家事も余裕をもってできるようになり、ファミリーとの関係がより深まりました。この経験を通して「自分がやらなければいけないことを自分でこなす」ことが、できるようになっていきました。

2つ目は、飛び込んでいく力です。渡米前に、私は自分との約束事を作りました。それは「迷ったらやる」ことです。当たり前のことのように聞こえるかもしれませんが、留学前の私は現在と比較にならないほど怠惰で、何事にも真剣になれず、中途半端な人間でした。私は、DECA（世界中の高校や大学でマーケティング・ホスピタリティ・マネジメントのビジネスリーダーと起業家を育成する国際組織）やサッカー、テニスなど、すべての活動に本気で取り組み、やり切ることができました。特にサッカーでは、得点王獲得など、留学前には想像もできなかったようなことを達成することができました。これらの経験は、留学生生活を充実させる上で、大きな役割を果たしていました。そして、この「迷ったらやる」という約束を自分としていなかったら、私の留学経験はここまで素晴らしいものにはならなかったと思います。この約束事は今も継続しており、自分の新たな可能性を見つけるのに大きく役立っています。

私は留学前に、「アメリカは自由の国だ」と思っていました。アメリカでは、すべてのものを認め合い、支え合い、そして自分のなりたいものに、何にでもなれるような国だと想像していました。しかし、私がこの留学経験で感じたアメリカは、それとは大きくかけ離れていました。LGBTQに対する差別は日本より圧倒的に多く、日本ではタブーのように感じる人種に関するジョークなどは、現地では日常的に耳にしました。私はそれを絶対に罰すべきものとは思わないが、好まれるようなことでもないと思います。もしアメリカという多様性があふれる国で生活をしたいならば、ある程度そのようなものに寛容になる必要があると感じました。またこのことがきっかけで、関心を持つようになったことがあります。それは、人種という違いは関係ないということです。現地では、人種間のジョークの言い合いはあっても、本当の意味での差別を、私はあまり感じませんでした。私は、アジア系の友人より、欧米系やアフリカ系アメリカ人の友人が多かった

ため、アメリカにおいては、人間関係を構築していく中で、人種を意識する必要は無いと感じるようになりました。この点について、今後もさらに掘り下げて探究を継続したいと考えています。

帰国後すぐに挑戦したことの中に、高校見学会での留学の成果発表があります。来年、恵那高校への進学を考えている中学生の前で、講師として自分の経験を伝えることができました。これからも機会があれば、自分からそのような活動に参加していきたいです。今後は留学を通して私が得た経験を後輩に伝えていき、留学への一歩を踏み出せない人の背中を押せるような活動をしていきたいと考えています。